

ると考えられた。また、FDG 集積とはなんら相関がなく、本薬剤の腫瘍における集積機序および、集積程度のもつ意義の検討が必要であると考えられた。

21. Exramedullary plasmacytoma の一例

渡辺 直人 清水 正司 富澤 岳人
 亀田 圭介 金澤 貴 豊嶋心一郎
 藤山 昌成 瀬戸 光 (富山医大・放)
 宮崎 孝子 渡辺 明治 (同・内)

症例は49歳男性で、主訴は右上腕腫瘍、両側頸部リンパ節腫脹、腹部腫瘍であった。無痛性の右上腕腫瘍、両側頸部リンパ節腫脹を認めていたが、全身倦怠感のため当院内科に入院した。検査成績は肝機能障害および尿中B-J蛋白を認めた。頸部リンパ節生検で上記と診断された。入院時CTでは両側頸部リンパ節腫脹、後腹膜腎腫瘍を認めた。Ga scintigraphyでは、右上腕、両側頸部、腹部に腫瘍集積を認めた。その後2種類の化学療法が施行された。上記腫瘍は縮小がみられ、Ga scintigraphyでは腫瘍集積は明らかな低下がみられた。今回われわれはGa scintigraphyを用いて、Exramedullary plasmacytoma 腫瘍伸展の範囲や治療効果の評価が可能であった。

22. 肺血流シンチグラフィによる肺動静脈瘻の経皮的塞栓術の術前後におけるシャント評価

末永 一路 (県立尾張病院・放)
 利根川 賢 松浦 徹 吉友 和夫
 (同・呼内)
 岩崎 浩康 吉本 学 横井 和志
 (同・放技)

症例は56歳、女性。主訴は労作時息切れ。既往歴に53歳時の脳梗塞。今回、肺癌検診で胸部異常陰影を指摘され'97.8.12当院呼内を受診。胸部単純X線写真と造影CTよりPAVFが疑われ、肺動脈造影より右のA^bを流入動脈とするPAVFが同定された。流入動脈径が5mmあり、頭部MRIで右尾状核に脳梗塞が認められ塞栓術の適応で、同10.6右大腿静脈より経皮的に塞栓術を施行。一方術前後で^{99m}Tc-MAAを185MBq投与後、ルーチンのdynamicとstatic imagesを撮像後、左右大脳半球と両腎および縦隔の集積を5分間収集し、術前後で一定のareaのROIを

計測し縦隔比を算出し、シャントの減少を確認できた。血ガスも改善し臨床経過も良好である。

23. ¹²⁵I-GSAによるラット肝虚血再灌流モデルにおける肝細胞障害および肝再生の検討

——第2報：組織所見との比較検討——

内藤 愛子 鈴木 一男 外山 宏
 古賀 佑彦 (藤田保衛大・放)
 鳥居 和之 若山 敦司 小森 義之
 蓮見 昭武 (同・消外)
 南 一幸 江尻 和隆
 (同・衛生学部診放技)

ラット肝虚血再灌流モデル(肝門部にて90分間阻血後、再灌流)を作製し、肝細胞障害と肝再生における¹²⁵I-GSAの有用性について、組織所見と比較し、検討した。術後1,3時間,7,14日のラットに¹²⁵I-GSAを静注し、肝集積率、血中集積率を測定した。また、PCNA染色、HE染色を行いDNA合成と細胞分裂率を求めた。1,3時間後のGSAの肝集積率の低下はトランスアミナーゼの上昇と虚血性肝細胞障害と一致した。7日後のGSAの肝集積率の増加と、DNA合成率、細胞分裂率のピークは一致した。アシアロ糖タンパク受容体制剤は、虚血性肝細胞障害と肝再生の指標として有用と考えられた。

24. 悪性黒色腫における¹²³I-IMPの有用性

鈴木賢一郎 村田 勝人 綾川 良雄
 宮田 伸樹 (愛知医大・放)
 新田悠紀子 池谷 敏彦 (同・皮膚)
 川島 定夫 東 直樹 (同・中放部)

目的：悪性黒色腫の腫瘍径と¹²³I-IMPの集積の関係、¹²³I-IMPと⁶⁷Gaの集積の比較について評価検討した。対象：症例37例、術前¹²³I-IMP検査を施行したもの12例、⁶⁷Ga検査を施行したもの9例、術後経過観察として双方を行った36例。結果：術前¹²³I-IMPで集積率は66.7%、⁶⁷Gaでは22.2%であった。腫瘍径1cm以下では¹²³I-IMPのみ4例中1例に集積を見た。術後では、双方の集積率に差は見られなかった。まとめ：¹²³I-IMPは、悪性黒色腫に有用な検査と考えられた。RIの集積と組織の比較は今後の検討課題である。